

老子と荘子、あわせて老荘という。ふたりとも春秋戦国時代の人物とされるが、謎もおおく、老子は実在すらたがわれている。老荘は道家の代表的思想家であるが、儒家の孔子と常に対比される。いわく、かたくなに道徳(二)ヒルな思想、いわく、仁(二)道(一)いわく、儒教と道教。諸子百家とよばれた人びとのなかで、たしかに孔子と老荘は二つのおおきな思想的潮流をうみだした。

老荘思想はふだん何気なく口にする表現にもひそんでいる。「井の中の蛙大海を知らず」とか「命長ければ鹿多し」といった諺から、管見(一)警咳(一)、あるいは大器晩成といった熟語まで、かたえあげたらきりがない。

老荘は無為自然(一)を説いた。実を返せば、作(一)りかた(一)きらった「おおく」に、水(一)のたりと、あくせ(一)せず、自然(一)ま(一)ま(一)に、風(一)のま(一)ま(一)に、よ(一)かせの人生を(一)つ(一)つ(一)の心構えを論じた(一)ので、授(一)か(一)つて老荘思想(一)は漢(一)の業で講じられた(一)が、(一)りオンセラ(一)の(一)り(一)で(一)形を変えて(一)よ(一)み(一)が(一)え(一)て(一)い(一)る(一)「(一)千(一)の(一)風(一)な(一)ら(一)ず(一)」、(一)作(一)者(一)無(一)為(一)自(一)然(一)の(一)真(一)髓(一)と(一)は(一)か(一)ら(一)ず(一)も(一)か(一)ら(一)で(一)て(一)い(一)る(一)よ(一)う(一)に(一)あ(一)る(一)。

# 無為自然 「千の風」と通底

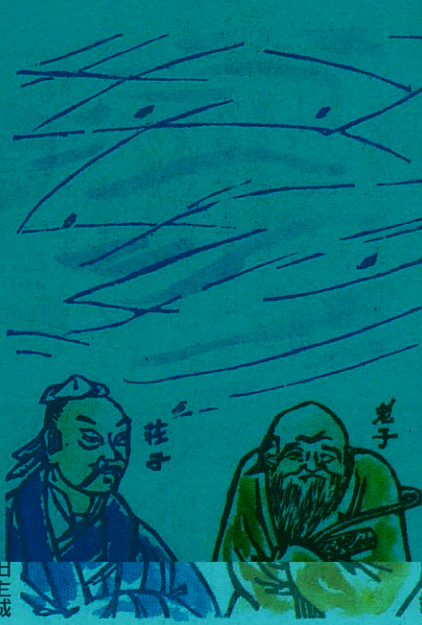
## カミ・ホトケはどこへ(一) 中牧 弘允

老荘は風説とか風来坊といばいかにも頼りないが、風とか風雲児となれば多少(一)の価値を借びてくる(一)。

### 老 荘

風は風説とか風来坊といばいかにも頼りないが、風とか風雲児となれば多少(一)の価値を借びてくる(一)。

ふとおもいだしたのは、かつて老荘の影響を受け、「風の哲学」を論じた教育者のことである。戦前、長野師範学校に、漢文教師をつとめた佐々木憲三という一風変わった



版画・田主誠

言葉を、氣(一)風(一)におきかえ、「風で物を考えよ」と解釈しなおしている。風とは生命であり、その本源に帰(一)せよ、と。

伊那谷に住みタオイスト(道家の徒)を名乗る詩人加島祥造氏も老荘思想の復権に一役買っている。むつかしい漢文を口語調で「この世界にはな、宇宙の息というやつが動いているんだよ。そのひとつを風と呼ぶ。」といったふう(一)に訳している。天地万物(一)一(一)体論を風(一)に託した箇所だが、風の音を聞くだけではだめで、天の音楽に耳を傾けない(一)。

中国では老荘思想は陰陽五行説や民間信仰などに(一)み道教として体系化(一)された。だが、日本へは庚申(一)信仰や神仙説が断片的に(一)た(一)ただけである。しか(一)ら(一)ば、老後の生き方の指針(一)として、あるいは死の問題(一)あるいは死の問題(一)へ(一)か(一)光(一)輝(一)を(一)増(一)している。洒脱(一)な(一)孔孟(一)より(一)も、むしろ(一)老(一)荘(一)に(一)あ(一)る(一)とい(一)つ(一)ても過言(一)で(一)はない(一)。

おわれ